

# 蒼 梧 考

大 野 圭 介

富山大學

## 緒 言

蒼梧という地名は『楚辭』離騷において、舜の葬られた地として登場し、『史記』五帝本紀においても舜の崩じた地として記されている。また『山海經』にも蒼梧の名はたびたび登場し、やはり舜の葬られた地として記され、

爰有文貝・離兪、鴟久・鷹・賈・委維・熊・羆・象・  
虎・豹・狼・視肉。

爰に文貝・離兪、鴟久・鷹・賈・委維・熊・羆・象・  
虎・豹・狼・視肉有り。(大荒南經)

蒼 梧 考(大野)

の如く、豊饒を産み出す樂園としての記述も見られる。また『楚辭』離騷や九歌には九疑<sup>①</sup>という名の山が見え、これも蒼梧と同じ山と解されている。

漢代に至っても蒼梧は舜の葬地として文献に登場する一方、漢の版圖の南端である嶺南の郡名としても用いられるようになり、さらに後世になると、例えば李白が永州(現湖南省)司戸であつた盧象に贈つた詩「贈盧司戸(盧司戸に贈る)」に

白雲遙相識 白雲 遙かに相い識り、  
待我蒼梧間 我を待つ 蒼梧の間。

と云う如く、中國南方の地をイメージする「歌枕」と化してゆく。ついでながら吉川幸次郎氏が臺灣へ留學に赴いた加地伸行氏に贈つた詩に

書生眞個儻 書生 眞に個儻、  
孤劍向蒼梧 孤劍 蒼梧に向こう。<sup>②</sup>

とあるのも、この用法を襲ったものである。

もともと楚地にあるとされた蒼梧は、やがて嶺南へ、果ては臺灣にまで移動していくわけであるが、かくの如く指す場所が次第に邊遠へと移つてゆくという特徴は、一般の地名にはあまり見られないものである。

こうした事實は蒼梧という地名に特殊な屬性があることを示唆するものであるが、詩語としての蒼梧についての論考には山内春夫「中國の詩に見る『蒼梧の雲』について」(『大谷女子大國文』一九八八年三月號)がある。山内氏は後漢の頃から見られるようになる「蒼梧雲」という表現に着目し、唐代にはこれが嶺南へ赴く人を送る詩での常套的表現として用いられるほか、古人への追慕の情をうたう表現としても用いられることを指摘する。

では蒼梧という一地名はいかにしてこのような「歌枕」となり得たのであろうか。山内論文はこの点については何ら觸れていない。本稿は先秦時代における蒼梧の原初的な意味を探ることにより、蒼梧を「歌枕」たらしめた原動力が何であったのかについて考えてみるものである。

## 一 蒼梧と九嶷

蒼梧の原初的な意味を考えるにあたって、まず先秦時代の文獻における蒼梧・九嶷の意味とその變遷を確認しておく。蒼梧が舜の葬地として見える最初の文獻には、『楚辭』離騷と『山海經』が挙げられる。まず離騷を見ると、

濟沅湘以南征兮、就重華而敝詞

……

朝發軔於蒼梧兮、夕吾至乎縣圃。

沅湘を濟りて以て南征し、重華に就きて詞を敝ぶ。

……

朝に軔とめぎを蒼梧に發し、夕に吾は縣圃に至る。

離騷の主人公は舜を祀る廟に己の志を述べ、その後蒼梧から車を發して、崑崙山③から天上に赴こうとする。ここでの蒼梧は天に通ずる地上の山として認識されている。

次いで『山海經』を見てみると、

蒼梧之山、帝舜葬于陽、帝丹朱葬于陰。(郭璞注)即九疑山也。禮記亦曰、舜葬蒼梧之野。

蒼梧の山、帝舜 陽みなみに葬られ、帝丹朱 陰きたに葬らる。

(郭璞注)即ち九疑山なり。禮記に亦た曰く、舜は蒼梧の野に葬らると。(海内南經)

有阿山者。南海之中、有汜天之山、赤水窮焉。赤水之

東、有蒼梧之野、舜與叔均之所葬也。爰有文貝・離兪・

鳴久・鷹・賈・委維・熊・羆・象・虎・豹・狼・視肉。

(郭璞注)叔均、商均也。舜巡狩死於蒼梧而葬之、商均因留死、亦葬焉。墓今在九疑之中。

阿山なる者有り。南海の中、汜天の山有り、赤水 焉

に窮まる。赤水の東、蒼梧の野有り、舜と叔均の葬らる

る所なり。爰に文貝・離兪・鳴久・鷹・賈・委維・熊・

羆・象・虎・豹・狼・視肉有り。(郭璞注)叔均とは、商

均なり。舜 巡狩して蒼梧に死して之に葬られ、商均

因りて留まりて死し、亦た焉に葬らる。墓は今九疑の中  
に在り。(大荒南經)

蒼 梧 考 (大野)

ここでの蒼梧はあらゆるものを産する場所として描かれる一方、熊羆象虎豹狼といった恐ろしい獣が守る、近寄り難い場所としても描かれる。同じ大荒南經に

帝堯・帝嚳・帝舜葬于岳山。爰有文貝・離兪・鳴久・

鷹・延維・視肉・熊・羆・虎・豹・朱木・赤枝・青華・

玄實。有申山者。(郭璞注)即狄山也。

帝堯・帝嚳・帝舜 岳山に葬らる。爰に文貝・離兪・

鳴久・鷹・延維・視肉・熊・羆・虎・豹・朱木・赤枝・

青華・玄實有り。申山なる者有り。(郭璞注)即ち狄山なり。

という異説もあるが、産出するものが微妙に違い、由来を異にするものと考えられる。

ところで舜の葬地に關しては、先秦の文獻には異説がある。『呂氏春秋』安死に

舜葬於紀市、不變其肆。

舜は紀市に葬られ、其の肆なせを變ぜず。

と云い、高誘注に「傳曰舜葬蒼梧九疑之山、此云紀市、九疑山下亦有紀邑。(傳に曰く舜は蒼梧九疑の山に葬らると、此れ紀市と云うは、九疑山の下に亦た紀邑有り。)」とあるが、確かに紀市が九疑山の麓の町であつたかどうかは確證はない。また『墨子』節葬下にも

舜西教乎七戎、道死、葬南己之市、衣衾三領、穀木之棺、葛以緘之。已葬而市人乘之。

舜は西のかた七戎を教え、道に死し、南己の市に葬られ、衣衾三領、穀木の棺、葛以て之を緘す。已に葬せられて市人 之に乗る。

とある。紀と己は音が通ずるから、紀市と南己之市は同一の地を指すと思われる。ところが漢代に入ると、『淮南子』齊俗訓に

昔舜葬蒼梧、市不變其肆。禹葬會稽之山、農不易其畝。(高誘注) 舜南巡狩、死蒼梧、葬冷道九疑山、不煩市井之所廢。

昔 舜は蒼梧に葬られ、市 其の肆なせを變ぜず。禹は會稽の山に葬られ、農 其の畝を易えず。(高誘注) 舜 南に巡狩し、蒼梧に死し、冷道九疑山に葬られ、市井の廢さるるを煩わさず。

と云う通り、紀市が蒼梧に改變されるようになり、さらに『淮南子』脩務訓の

舜作室、築牆茨屋、辟地樹穀、令民皆知去巖穴、各有家室。南征三苗、道死蒼梧。

舜は室を作り、牆と茨屋を築き、地を辟き穀を樹え、民をして皆な巖穴を去るを知り、各々家室有らしむ。南に三苗を征し、道に蒼梧に死す。

や、『禮記』檀弓の

舜葬於蒼梧之野、蓋三妃未之從也。

舜は蒼梧の野に葬らる、蓋し三妃 未だ之に従わざるなり。

の如く、蒼梧は舜の葬地として定着するのである。

一方、蒼梧山は楚地の南端の地名としても先秦の文獻に見えている。『莊子』外物には

任公子爲大鉤巨緇、五十犗以爲餌、蹲乎會稽、投竿東海、且旦而釣、期年不得魚、已而大魚食之、……任公子得若魚、離而腊之。自制河以東、蒼梧已北、莫不厭若魚者。

任公子 大鉤・巨緇を爲り、五十犗以て餌と爲し、會稽に蹲り、竿を東海に投げ、且旦にして釣る、期年にして魚を得ず、已にして大魚 之を食い、……任公子 若の魚を得て、離して之を腊にす。制(浙)河より以東、蒼梧已北、若の魚に厭かざる者なし。

蒼 梧 考(大野)

とあるが、蒼梧は浙河とともに界限の地と解されている。また『初學記』卷一引『歸藏』には

有白雲出蒼梧、入於大梁。

白雲有りて蒼梧より出で、大梁に入る。

と云うが、大梁は戰國魏の都で、『漢書』地理志・陳留郡浚儀縣に「故大梁、魏惠王自安邑徙此(故の大梁、魏の惠王安邑より此に徙る)」とある。蒼梧が北の大梁とともに、雲の出入りする界限の地として認識されていたことがわかる。さらに『戰國策』楚策一・蘇秦爲趙合從說楚威王の條には

蘇秦爲趙合從、說楚威王曰、「楚、天下之疆國也。大王、天下之賢王也。楚地西有黔中・巫郡、東有夏州・海陽、南有洞庭・蒼梧、北有汾陰之塞・郟陽、地方五千餘里、帶甲百萬、車千乘、騎萬匹、粟支十年、此霸王之資也。……」

蘇秦 趙の爲に合從せんとし、楚威王に説きて曰く、

「楚は、天下の疆國なり。大王は、天下の賢王なり。楚地の西には黔中・巫郡有り、東には夏州・海陽有り、南には洞庭・蒼梧有り、北には汾陘の塞・郇陽有り、地は方五千餘里、帶甲は百萬、車は千乘、騎は萬匹、粟は十年を支う、此れ霸王の資なり。……」

と云い、やはり蒼梧は楚地の南端として認識されている。以上を要するに、蒼梧は楚地の南端にあり、舜の葬られた所であつて、またあらゆるものを産する樂園としても傳えられているのである。

一方九疑の名も『楚辭』に見えているが、離騷に

百神翳其備降兮、九疑續其竝迎。

百神 おみ 翳おほいて其れ備ともに降り、九疑 さかに其れ竝あび迎う。

九歌・湘夫人に

九疑續兮竝迎、靈之來兮如雲。

九疑 さかに竝あび迎え、靈の來たること雲の如し。

と云う通り、天神を迎える九疑山の神々として描かれている。この記述だけを見るかぎり、そこに舜の葬地たる蒼梧山との關連は見出し難い。離騷では主人公は蒼梧から崑崙山に向けて出發し、天上を遊行するも容れられず、百神の降る九疑山で靈氣が再び故國を捨てて遠遊することを勧めたが、そこでの蒼梧と九疑山は從來同一の山と考えられてきたが、そう認めてよい確かな根據は見出し難いのである。また離騷と九歌における九疑山の記述が非常に似通っていることにも注意すべきであろう。當時神々の降る山としての九疑山のイメージが、舜の葬地としての蒼梧とは別の形で定着していたと考えられるのである。

『淮南子』になると、九疑山が楚地の南端として描かれ、蒼梧との接点が見出されるようになる。

九疑之南、陸事寡而水事衆、於是民人被髮文身、以像

鱗蟲、……鴈門之北、狄不穀食、賤長貴壯、俗尙氣力、……。

九疑の南、陸事寡くして水事衆し、是に於て民人は被髮文身し、以て鱗蟲に像る、……鴈門の北、狄は穀食せず、長を賤しみ壯を貴び、俗は氣力を尙ぶ、……。〔原道訓〕

の如く、九疑の南が鴈門の北とともに未開の地として認識されている。『史記』貨殖列傳にも

衡山・九江・江南・豫章・長沙、是南楚也。……九疑・蒼梧以南至儋耳者、與江南大同俗、而楊越多焉。番禺亦其一都會也、珠璣・犀・瑇瑁・果・布之湊。

衡山・九江・江南・豫章・長沙は、是れ南楚なり。……九疑・蒼梧以南儋耳に至る者は、江南と大よそ俗を同じくするも、楊越多し。番禺は亦た其の一都會なり、珠璣・犀・瑇瑁・果・布の湊なり。

と云い、やはり九疑の南が異民族の住む地とされている。九疑はまた軍事上の要衝でもあり、『淮南子』人間訓に

又利越之犀角・象齒・翡翠・珠璣、乃使尉屠睢發卒五十萬、爲五軍、一軍塞罽城之嶺、一軍守九疑之塞、一軍處番禺之都、一軍守南野之界、一軍結餘干之水、三年不解甲弛弩、……

又た越の犀角・象齒・翡翠・珠璣を利せんとし、乃ち尉屠睢をして卒五十萬を發し、五軍を爲さしめ、一軍は罽城の嶺を塞ぎ、一軍は九疑の塞を守り、一軍は番禺の都に處り、一軍は南野の界を守り、一軍は餘干の水に結し、三年 甲を解き弩を弛めず、……。

と云う。以上を要するに、戰國期においては九疑は神々が天から陟降する山として認識され、漢代に至つて楚地の南端の地名として用いられるようになったといえる。

九疑と蒼梧が初めて結びつくのは、『山海經』海内經の

南方蒼梧之丘、蒼梧之淵、其中有九疑山、舜之所葬、在長沙零陵界中。(郭璞注) 山今在零陵營道縣南、其山九谿皆相似、故云九疑。古者總名其地爲蒼梧也。

南方蒼梧の丘、蒼梧の淵、其の中に九疑山有り、舜の葬らるる所、長沙零陵界中に在り。(郭璞注) 山は今の零陵營道縣の南に在り、其の山は九谿皆な相い似たり、故に九疑と云う。古者 其の地に總名して蒼梧と爲すなり。

という記述であるが、ここには「長沙」「零陵」という漢代の地名が見えているため、後世に増補されたことが疑われている。『史記』秦始皇本紀にも

(三十七年) 十一月、行至雲夢、望祀虞舜於九疑山。

(三十七年) 十一月、行きて雲夢に至り、虞舜を九疑山に望祀す。

という記述があり、九疑山が蒼梧と同じ舜の葬地として認識されている。また長沙馬王堆一號漢墓から出土した「地

形圖」では、九疑山とみられる九つの尖った山嶺を持つ山が大きく描かれ、「帝舜」という注記があり、舜の葬地たる蒼梧山と同一の山と認識されている。これらを要するに、蒼梧山と九疑山が確實に同一の機能を持つ同一の山として認識されるようになるのは、秦漢以後のことといえるのであり、それ以前においては假に同一の山であったとしても、蒼梧と九疑という二つの呼稱には、その機能に明白な差異が認められるのである。

## 二 樂園と墓所——宇宙山としての蒼梧

### (一) 聖地としての二面性

前章で見てきた通り、蒼梧の機能は(一) 舜の葬地に大別できる。まず始めに『山海經』に見える帝王の墓所に關する記述から、舜の葬地としての機能がいかなる意味をもつものであるかを考えてみたい。

『山海經』に見える帝王の墓所に關する記述の多くは



「爰有」の後ろに熊・羆・虎・豹などの猛獸をはじめとする様々なるものを列擧する。

狄山、帝堯葬于陽、帝嚳葬于陰。爰有熊・羆・文虎・雌・豹・離朱・視肉。吁咽、文王皆葬其所。一曰湯山。一曰爰有熊・羆・文虎・雌・豹・離朱・鳩久・視肉・虜交。其范林方三百里。

狄山、帝堯 陽に葬られ、帝嚳 陰に葬らる。爰に熊・羆・文虎・雌・豹・離朱・視肉有り。吁咽（郭璞云未詳）、文王皆な其の所に葬らる。一に曰く湯山と。一に曰く爰に熊・羆・文虎・雌・豹・離朱・鳩久・視肉・虜交有り。其の范林は方三百里と。（海外南經）

務隅之山、帝顓頊葬于陽、九嬪葬于陰。一曰爰有熊・羆・文虎・離朱・鳩久・視肉。

務隅の山、帝顓頊 陽に葬られ、九嬪 陰に葬らる。一に曰く爰に熊・羆・文虎・離朱・鳩久・視肉有りと。（海外北經）

蒼 梧 考（大野）

赤水之東、有蒼梧之野、舜與叔均之所葬也。爰有文貝・離兪・鳩久・鷹・賈・委維・熊・羆・象・虎・豹・狼・視肉。

赤水の東、蒼梧の野有り。舜と叔均の葬らるる所なり。爰に有文貝・離兪・鳩久・鷹・賈・委維・熊・羆・象・虎・豹・狼・視肉有り。（大荒南經）

帝堯・帝嚳・帝舜葬于岳山。爰有文貝・離兪・鳩久・鷹・延維・視肉・熊・羆・虎・豹・朱木赤枝・青華・玄實。

帝堯・帝嚳・帝舜 岳山に葬らる。爰に文貝・離兪・鳩久・鷹・延維・視肉・熊・羆・虎・豹・朱木の赤枝・青華・玄實なる有り。（大荒南經）

東北海之外、大荒之中、河水之間、附禺之山、帝顓頊與九嬪葬焉。爰有鳩久・文貝・離兪・鸞鳥・皇鳥・大物・小物。有青鳥・琅鳥・玄鳥・黃鳥・虎・豹・熊・羆・黃蛇・視肉・瑤瑰・瑤碧・皆出衛于山。丘方圓三百

里、丘南帝俊竹林在焉。大可爲舟。

東北海の外、大荒の中、河水の間、附禺の山、帝顛頊と九嬪と焉（三）に葬らる。爰に鷓久・文貝・離兪・鸞鳥・皇鳥・大物・小物有り。青鳥・琅鳥・玄鳥・黃鳥・虎・豹・熊・熊・黃蛇・視肉・瑤瑰・瑤碧有り、皆な衛于山に出づ。丘あり方圓三百里、丘の南は帝俊の竹林焉に在り。大いなること舟を爲る（四）べし。（大荒北經）

列擧されるものは虎・豹・狼・熊・熊のような猛獸もある一方で、様々な動植物や鑛物もあり、視肉は郭璞が「聚肉形如牛肝、有兩目也。食之無盡、尋復更生如故。（聚肉形は牛肝の如く、兩目有るなり。之を食らえば盡くる無く、尋いで復た更生すること故の如し。）」と注する如く、他の動植物とともに無限の豐饒を象徴するものと考えられる。虎・熊・熊もまた豐饒の象徴であることは、『詩經』大雅「韓奕」七章において韓の國土の豊かさをたたえるくだりに

蹶父孔武、靡國不到。爲韓媾相攸、莫如韓樂。孔樂韓

土、川澤訐訐、魴鱣甫甫、麀鹿瑣瑣、有熊有羆、有貓有虎、慶既令居、韓媾燕譽。

蹶父 孔だ武なり、國として到らざる靡し。韓媾の爲に攸を相る（五）に、韓の樂しきに如くは莫し。孔だ樂しいかな韓土、川澤 訐訐たり（廣大な貌）、魴鱣 甫甫たり（大きい貌）、麀鹿（おじかめじか） 瑣瑣たり（群れ集う貌）、熊有り羆有り、貓有り虎有り、慶して既に居らしむ、韓媾 燕して譽れあり。

と云う通りである。

一方「爰有」を伴わない墓所の記述もあるが、例えば

后稷之葬、山水環之。在氏國西。

后稷の葬、山水 之を環る。氏國の西に在り。（海内

西經）

湘水出舜葬東南陬、西環之。入洞庭下。

湘水 舜葬の東南の陬より出で、西に之を環る。洞庭

の下に入る。(海内東經)

の如く、水が葬地の周圍を取り巻いていたり、

漢水出鮒魚之山、帝顓頊葬于陽、九嬪葬于陰、四蛇衛之。

漢水 鮒魚の山より出で、帝顓頊 陽に葬られ、九嬪陰に葬られ、四蛇 之を衛る。(海内東經)

の如く、蛇が葬地を守っていたりする。

このように水や猛獸・蛇に守られた豊饒な場所といえ、すぐに擧げられるのは『山海經』海内四經における崑崙山である。海内西經には

海内昆侖之虛、在西北、帝之下都。昆侖之虛、方八百

里、高萬仞。上有木禾、長五尋、大五圍。面有九井、以玉爲檻。面有九門、門有開明獸守之、百神之所在。在八隅之巖、赤水之際、非仁羿莫能上岡之巖。

著 梧 考(大野)

海内昆侖の虚は、西北に在り、帝の下都なり。昆侖の虚は、方八百里、高さ萬仞。上に木禾有り、長さ五尋、大いさ五圍。面に九井有り、玉を以つて檻と爲す。面に九門有り、門に開明獸有りて之を守り、百神の在る所なり。八隅の巖、赤水の際に在り、仁羿に非ざれば岡の巖を上る能う莫し。

昆侖南淵深三百仞。開明獸身大類虎而九首、皆人面、東嚮立昆侖上。

昆侖の南淵は深さ三百仞。開明獸 身は大いさ虎に類して九首、皆な人面、東嚮して昆侖の上に立つ。

開明西有鳳皇・鸞鳥、皆戴蛇踐蛇、膺有赤蛇。

開明の西に鳳皇・鸞鳥有り、皆な蛇を戴き蛇を踐み、膺ひなに赤蛇有り。

開明北有視肉・珠樹・文玉樹・玕琪樹・不死樹。鳳皇・鸞鳥皆戴獻。又有離朱・木禾・柏樹・甘水・聖木・

曼兌、一曰挺木牙交。

開明の北に視肉・珠樹・文玉樹・玕琪樹・不死樹有り。  
鳳皇・鸞鳥は皆な獻たてを戴く。又た離朱・木禾・柏樹・甘  
水・聖木・曼兌有り、一に曰く挺木牙交と。

開明東有巫彭・巫抵・巫陽・巫履・巫凡・巫相、夾窳  
窳之尸、皆操不死之藥以距之。窳窳者、蛇身人面、貳負  
臣所殺也。

開明の東に巫彭・巫抵・巫陽・巫履・巫凡・巫相有り、  
窳窳の尸を夾み、皆な不死の藥を操りて以て之を距ぐ。  
窳窳なる者は、蛇身人面、貳負の臣の殺せし所なり。

開明南有樹、鳥六首、蛟・蝮・蛇・蝮・蛇・豹・鳥秩樹、  
于表池樹木、誦鳥・鵠・視肉。

開明の南に樹、鳥六首、蛟・蝮・蛇・おながぎる蝮・豹・鳥  
秩樹、于て池に表する樹木、誦鳥・鵠・視肉有り。

という記述が續き、そこに描かれる崑崙山は三百仞もの深

い淵に阻まれ、人面虎身の開明獸が守っているが、その中  
は様々な鳥獸や樹木を産し、鸞鳳の棲む樂園であつて、百  
神の棲む「帝の下都」である。

また『穆天子傳』には、樂園たる崑崙山の中に虎豹熊羆  
がいてるとする記述がある。

季夏丁卯、天子北升于春山之上、以望四野、曰、春山、  
是唯天下之高山也。孳木□華不畏雪、天子于是取孳木華  
之實、曰、春山之澤、清水出泉、溫和無風、飛鳥百獸之  
所飲食、先王所謂縣圃。天子於是得玉策枝斯之英、曰、  
春山、百獸之所聚也、飛鳥之所棲也。爰有□獸、食虎豹  
如麋而載骨、盤□始如麕、小頭大鼻。爰有赤豹白虎、熊  
羆豺狼、野馬野牛、山羊野豕。爰有白鳥青雕、執太羊、  
食豕鹿。

季夏丁卯、天子 北のかた春山の上に升り、以て四野  
を望み、曰く、春山、是れ唯れ天下の高山なりと。孳木  
□華は雪を畏れず、天子 是に于て孳木華の實を取り、  
曰く、春山の澤、清水 泉を出だし、溫和無風、飛鳥百

獸の飲食する所、先王の所謂る縣圃なりと。天子 是に於て玉策枝斯の英を得て、曰く、春山、百獸の聚まる所なり、飛鳥の棲む所なりと。爰に□獸有り、虎豹を食すること麋の如くして骨を載せ（食はずに残し）、□始を盤ばんること？麋の如く、小頭にして大鼻。爰に赤豹白虎、熊、羆豺狼、野馬野牛、山羊野豕有り。爰に白鳥青雕有り、太羊を執り、豕鹿を食らう。（卷二）

崑崙の中の山とされる縣圃は、樂園的な風物が描かれながら、同時に虎豹を食するような恐ろしい獸も描かれる。縣圃に入つて永遠の安樂を得ようとするならば、まずこれらの怪獸に打ち克たなければならぬのである。それはいわば通過儀禮のようなものである。御手洗勝氏が指摘するように、帝の地上での都である崑崙山は「天地の連結者でありながら、天地の連結者でない」二面性を持つのである。帝王の墓所がこれと同様の機能を持つてゐることは、大いに注意すべきことであろう。海内南經の蒼梧の記事においても、その後

蒼梧考（大野）

汜林方三百里、在狻狻東。狻狻知人名、其爲獸如豕而人面、在舜葬西。

汜林は方三百里、狻狻の東に在り。狻狻は人の名を知り、其の獸爲るは豕の如くして人面、舜葬の西に在り。

窺窳龍首、居弱水中、在狻狻知人名之西、其狀如龍首、食人。

窺窳は龍首、弱水の中に居り、狻狻人名を知るの西に在り、其の狀は龍の如き首、人を食らう。

という記事が續き、この狻狻や窺窳は、崑崙山における人面九首の開明獸と同様に恐ろしい性質を持った、蒼梧を守護する獸と考えられるのである。

また漢代以後の記述とみられる海内經の

南方蒼梧之丘、蒼梧之淵、其中有九疑山、舜之所葬、在長沙零陵界中。

南方蒼梧の丘、蒼梧の淵、其の中に九疑山有り、舜の

葬らるる所、長沙零陵界中に在り。

の條でも、九嶷山は蒼梧の淵の中にあるとされ、水に守られてゐる近寄り難さという性質の痕跡を窺える。

かくの如く、蒼梧を始めとする帝王の墓所は、崑崙山と同様に近寄りがたい場所であり、同時に豊饒をもたらず樂園であるという二面性を具えていることが確認できた。崑崙山にはもう一つ「上帝の地上での都」という機能があつたのであるが、これは即ち崑崙山が「天地を往來できる通路」であることを意味する<sup>⑥</sup>。では蒼梧には「天地の通路」としての機能を認めることができるのであろうか。次章ではこのことについて考えてみたい。

(二) 世界樹と墓所

世界の古代神話において、大地の中心は重要な意味をもつ。宗教史學者エリアーデの研究によってまとめられたところを要約すれば、そこには山岳や巨木、あるいは柱のよくな高いものが垂直にそびえ、それは天上と地上と地下を

貫き、互いに交通できる唯一の場所となる。この世にある人はそこを登って天上に至ることによって、不死を得ることができるとされた。こうした山や樹木は宇宙山、あるいは世界樹と呼ばれる。佛教における須彌山がそれであり、キリスト教においてはエルサレムが宇宙山の頂上に位置する聖地であり、ゴルゴタの丘はその絶頂であり、アダムとイブもそこで生まれたとされる<sup>⑦</sup>。

中國においても例外ではなく、前章において觸れた崑崙山にこうした宇宙山や世界樹の姿をうかがえることは、既に多くの研究者が指摘しているとおりである<sup>⑧</sup>。

崑崙山は通常中國から見て西北の地にあり、大地の中心であつて神仙の住む高山であるというイメージで語られる。漢以後の文獻で

崑崙者、地之中也。

崑崙なる者は、地の中なり。(『太平御覽』卷三六引『河圖括地象』)

崑崙墟在西北、去嵩高五萬里、地之中也。其高萬一千

里。河水出其東北陬。

崑崙の墟は西北に在り、嵩高を去ること五萬里、地の中なり。其の高さは萬二千里。河水 其の東北の陬より出ず。〔水經〕卷一・河水)

と記される如くである。人々の視界を遮り、そこから容易に向こうへ行くことのできない高山が大地の中心と考えられ、その向こう側にも「我々の世界」と同じような世界が広がっていると想像されたのである。戦國末期の鄒衍が唱えた大九州説は、こうした立場に立ったものであり、『史記』孟子荀卿列傳の傳える所では、我々が天下と言っているのは、實は全世界の八十一分の一にすぎず、しかも東南の隅にあつて、名を赤縣神州という、というのがその大要である。<sup>⑨</sup> 御手洗勝氏は先の『水經』の記事と合わせて、鄒衍は中國の西北の崑崙を大地の中心に置いて大九州説を考えたと推論する。<sup>⑩</sup> 中國においては邊遠にある山に大地の中心としての機能を見出す發想があつたことは、十分注意に値することであらう。

蒼 梧 考(大野)

では楚地の南端の山とされていた蒼梧には、崑崙と同等の宇宙山の機能を認めることができるのであろうか。ここで『山海經』において蒼梧山の近くにあるとされる建木に注目したい。

『山海經』における建木は次の如くである。

有木其狀如牛、引之有皮、若纓・黃蛇。其葉如羅、其實如欒、其木若藷、其名曰建木。在窳窳西弱水上。

木有り其の狀は牛の如く、之を引けば皮有り、纓・黃蛇の若し。其の葉は羅の如く、其の實は欒の如く、其の木は藷の若く、其の名を建木と曰う。窳窳の西 弱水上に在り。(海内南經)

有木、青葉紫莖、玄華黃實、名曰建木、百仞無枝、有九櫚、下有九枸、其實如芒、其葉如芒、大暉爰過、黃帝所爲。有窳窳、龍首、是食人。有青獸、人面、名曰猩猩。木有り、青き葉に紫の莖、玄き華に黃の實、名を建木と曰い、百仞にして枝無く、九櫚(ちよく、曲がりくねった枝)

有り、下に九枸（交錯する根）有り、其の實は芒の如く、其の葉は芒の如く、大暉 爰に過り、黃帝の爲むる（保護する）所。窺廬有り、龍首、是れ人を食う。青獸有り、人面、名を猩猩と曰う。（海内經）

海内南經では蒼梧山に續く一連の聖地的風物の一つとして建木が描かれるが、建木そのものの姿形のみを描いており、世界樹としての特色は見出し難い。蒼梧山そのものが崑崙の陰に隠れて宇宙山としての特色があまり描かれていないことと關係があるものと思われる。これに比べて海内經の建木は「百仞にして枝無し」という、非常に高い柱状の姿から、世界樹としての特色をうかがうことができる。

『呂氏春秋』においては、建木は大地の中央にあるとされる。

白民之南、建木之下、日中無影、呼而無響、蓋天地之中也。（高誘注）建木在廣都南方、衆帝所從上下也、復在白民之南。

白民の南、建木の下、日中すれば影無く、呼べども響き無し、蓋し天地の中なり。（高誘注）建木は廣都の南方に在り、衆帝の從りて上下する所なり、復た白民の南に在り。（『呂氏春秋』有始）

『淮南子』墜形訓にも同趣旨の記事が見える。白民は『山海經』海外西經に見える邊遠の國の名。廣都は『山海經』海内經に言う都廣之野に相當すると考えられる。太陽が南中すると影がなくなるというのは、そこが大地の中心であることを意味する。高誘注では多くの帝がそこから天地の間を上下すると云い、天地を繋ぐ存在として考えられている。建木はもともと上帝の通り道とされていたものが、『山海經』海内經では黃帝や大暉のような人王の通った所に置き換えられるようになったのであろう。

「無枝」の樹木は、『山海經』では他に三桑無枝がある。

又北水行五百里、流沙三百里、至于涇山、其上多金玉。三桑生之、其樹皆無枝、其高百仞。百果樹生之。其下多



怪蛇。

又た北に水行すること五百里、流沙三百里、洄山に至る、其の上に金玉多し。三桑之に生じ、其の樹は皆な枝無し、其の高さは百仞。百果樹之に生ず。其の下に怪蛇多し。(北次二經)

三桑無枝、在歐絲東、其木長百仞、無枝。

范林方三百里、在三桑東、洲環其下。

務隅之山、帝顛頊葬于陽、九嬪葬于陰。一曰爰有熊・

羆・文虎・離朱・鴟久・視肉。

平丘在三桑東、爰有遺玉・青鳥・視肉・楊柳・甘柎・

甘華、百果所生、有兩山夾上谷、二大丘居中、名曰平丘。

三桑無枝、歐糸の東に在り、其の木は長さ百仞、枝無し。

范林は方三百里、三桑の東に在り、洲其の下を環る。

務隅の山、帝顛頊陽に葬られ、九嬪陰に葬らる。

一に曰く爰に熊・羆・文虎・離朱・鴟久・視肉有りと。

平丘は三桑の東に在り、爰に遺玉・青鳥・視肉・楊

柳・甘柎・甘華有り、百果の生ずる所、兩山有りて上谷

を夾み、二大丘中に居る、名を平丘と曰う。(海外北經)

東北海外、大荒之中、河水之間、附禺之山、帝顛頊

與九嬪葬焉。爰有鴟久・文貝・離兪・鸞鳥・皇鳥・大

物・小物。有青鳥・琅鳥・玄鳥・黃鳥・虎・豹・熊・

羆・黃蛇・視肉・瑤瑰・瑤碧、皆出衛于山。……有三桑

無枝。丘西有沈淵、顛頊所浴。

東北海外、大荒の中、河水の間、附禺の山、帝顛頊

と九嬪と焉こゝにに葬らる。爰に鴟久、文貝、離兪、鸞鳥、皇

鳥、大物、小物有り。青鳥、琅鳥、玄鳥、黃鳥、虎、豹、

熊、羆、黃蛇、視肉、瑤瑰、瑤碧有り、皆な衛于山に出

づ。……三桑無枝有り。丘の西に沈淵有り、顛頊の浴す

る所。(大荒北經)

海外北經と大荒北經はいずれも顛頊の葬地と關係づけられており、様々なものを産する場所で、聖地を特徴づける要

素の一つとして三桑無枝の木が描かれる。北次三經のものも、その特徴は同じで、「百果樹」も海外北經の「百果の生ずる所」という記述と關係が有るものとみられる。帝王の墓所が世界樹によつて地上・天上の世界と連結されているのが、こうした記事で描かれる聖地なのであり、枝が無いという特徴は、普通の人は容易に登れないことを示すものと考えられよう。

小南一郎氏は桑の木と男女の結合に關する傳承との關連の深さを指摘しており、その例として『詩經』鄘風「桑中」では

爰采唐矣、沫之鄉矣。云誰之思、美孟姜矣。期我乎桑中、要我乎上宮、送我乎淇之上矣。

爰に唐かすらを采る、沫の郷に二三に誰か之を思ふ、美なる孟姜姜家の姉。我と桑中に期し、我を上宮地名、一説に建物の上ひかに要え、我を淇の上ほぶに送る。

と云い、桑畑が密會の場所として描かれること、また『墨

子』明鬼下篇には

燕之有祖、當齊之社稷、宋之有桑林、楚之有雲夢也、此男女之所屬而觀也。

燕の祖沼地の名有るは、齊の社稷、宋の桑林有り、楚の雲夢有るに當たるなり、此れ男女の屬あつまりて觀る所なり。

と云い、桑林が歌垣の場となつていたことを挙げ、これらの桑は世界樹を象徴するもので、天上の生命力を地上に傳えるものであり、男女がその下で逢引するのは、その生命力にあやかつて多産を祈らうとするものであると考える<sup>⑩</sup>。

また東方の世界樹として知られる扶桑にも「桑」の字が含まれることも見逃せない。扶桑は『山海經』海外東經に

湯谷上有扶桑、十日所浴、在黑齒北。居水中、有大木、九日居下枝、一日居上枝。

湯谷の上に扶桑有り、十日の浴する所、黒齒の北に在

り。水中に居り、大木有り、九日 下枝に居り、一日 上枝に居る。

盤蜿して下に屈し、三泉に通ず。

と云い、『淮南子』天文訓に

日出于暘谷、浴于咸池、拂于扶桑、是謂晨明。登于扶桑、爰始將行、是謂朏明。至于曲阿、是謂旦明。

日は暘谷に出で、咸池に浴し、扶桑に拂う、是れ晨明と謂う。扶桑に登り、爰に始めて將に行かんとす、是れ朏明と謂う。曲阿に至り、是れ旦明と謂う。

と云う通り、太陽がその上から一日の遊行に出発しようとする樹木である。時代は下るが『太平御覽』卷九五五引

『玄中記』に

天下之高者、有扶桑無枝木焉、上至於天、盤蜿而下屈、通三泉。

天下の高き者は、扶桑無枝の木有り、上は天に至り、

著 梧 考(大野)

とあり、ここでの扶桑は天から地下の三泉に通ずる世界樹として描かれているが、扶桑にも「無枝」の傳承があったことは注意すべきであろう。『山海經』の三桑無枝は、或いは扶桑と起源を一にするものであるかも知れない。

かく見てくると、帝王の墓所が桑によって天と連結されているのも、地下の帝王へ天上から永遠の生命力を伝えようとする意味があるのではあるまいか。そして桑のみならず高山もまた、地下の帝王と天上の世界を結ぶ通路と考えられたのである。蒼梧山も舜の墓所から天上につながる山の一つとして、楚人の信仰を集めたのであろう。

宇宙山や世界樹によって天上の世界と結びついていた地下の帝王は、獨り舜だけではなかった。黄帝は『莊子』至樂に「崑崙之虛、黃帝之所休。(崑崙の虚は、黃帝の休いし所。)」と云う通り崑崙と關係が深く、務隅の山に葬られる顛頊もまた三桑無枝によって天に結びついていた。そして帝嚳と帝堯が葬られる狄山には范林なる方三百里の林があ

つた。この范林は、『山海經』の他の部分にも數回登場する。一つは先に引いた海外北經の顛頊が葬られた務隅の山の條の前であり、もう一つは海内北經の

昆侖虛南所有汜林方三百里。

昆侖虛の南に有る所の汜林は方三百里。

という條である。これを海内南經狄山のものとも比べながら、その特徴をまとめると、范(汜)林には(一)帝王の葬地の近くにある(二)崑崙や、その他のあらゆるものを産する樂園的世界の近くにある(三)一邊三百里の方形である、といった特徴があることがわかる。郭璞は「言林木氾濫布衍也。(林木の氾濫布衍するを言うなり。)」とするが、この三つの特徴からすると、范林はこの字義通りの解釋にはとどまらず、神的な意味を持つ林一般を指すものと思われる。とりわけ(三)の「方三百里」という特徴は、前引の大荒北經の顛頊の葬地にも見られ、さらに

流黃鄴氏之國、中方三百里。有塗四方、中有山。在后稷之葬西。

流黃鄴氏の國は、中は方三百里。塗四方に有り、中に山有り。后稷の葬の西に在り。(海内西經)

の如く、后稷の葬地の近くにも見られ、聖地を特徴づけるものであるといえる。この范林も世界樹的な機能を持つものであったことが考えられよう。

かくの如く宇宙山や世界樹を経て天上から生命力を得た墓所は、あらゆるものを産する樂園のイメージが付與されるようになる。『山海經』海内經には

西南黒水之間、有都廣之野、后稷葬焉。爰有膏菽・膏稻・膏黍・膏稷、百穀自生、冬夏播琴。鸞鳥自歌、鳳鳥自舞、靈壽實華、草木所聚。爰有百獸、相群爰處。此草也、冬夏不死。

西南黒水の間、都廣の野有り、后稷 焉に葬らる。爰に膏菽・膏稻・膏黍・膏稷有り、百穀 自ら生じ、冬夏

播琴（郭璞曰「猶播殖」）す。鸞鳥 自ら歌い、鳳鳥 自ら憐い、靈壽 實り華き、草木の聚まる所。爰に百獸有り、相い群れて爰に處る。此の草や、冬夏 死せず。

と云い、后稷の葬地に鳳鸞の舞う樂園の記述がある。農神として知られる周祖后稷の葬地から、様々な穀物が芽生えるのであり、これは一種の「死と再生」イメージの體現であるといえる。后稷はその肉體が死ぬことにより、天上から新たな生命力を得て、百穀を再生し、眞の農神となり得たのである。

ここでは舜の葬地に見られた虎豹熊羆などの猛獸は見えず、樂園としてのイメージのみが強調され、より美化されたものになっているが、一方で既に引いた海内西經では、后稷の葬地は「山水環之」となっていて、近づきにくい聖地のイメージを残している。古代中國における帝王の墓所の傳説は、近寄り難さと樂園性の二律背反的な性質を持つ聖地の傳説と不可分に結びついているのであり、蒼梧もそうした聖地の一つだったのである。そしてその樂園性は、

蒼 梧 考（大野）

天上と結ばれた宇宙山によって擔保されていたのである。

### （三） 蒼梧の名の意味

次に蒼梧という名にはどのような意味が含まれているのかを考えてみたい。「蒼」は『説文解字』艸部に「艸色也」と云い、「梧」は同じく『説文解字』木部に「梧桐木」と云い、「蒼梧」を字義通り解せば「青々としたあおざり」となる。ところで梧桐には鳳凰との関係の深さを示す記述が先秦の文獻に散見される。『詩經』大雅「卷阿」には

鳳皇鳴矣、于彼高岡。梧桐生矣、于彼朝陽。萋萋萋萋、  
離離啾啾。

鳳皇は鳴けり、彼の高岡に于いてす。梧桐は生ぜり、彼の朝陽に于いてす。萋萋たり萋萋たり、離離たり啾啾たり。

と云い、『韓詩外傳』卷八には

黃帝即位、……於是黃帝乃服黃衣、戴冕、致齋于宮、鳳乃蔽日而至。黃帝降于東階、西面再拜稽首曰、「皇天降祉、不敢不承命。」鳳乃止於東園、集帝桐上、食帝竹實、沒身不去。

黃帝 即位し、……是に於いて黃帝 乃ち黃衣を服し、冕を戴き、齋を宮に致せば、鳳 乃ち日を蔽いて至る。黃帝 東階に降り、西面して再拜稽首して曰く、「皇天社さいわいを降せり、敢えて命を承げざるにあらず」と。鳳 乃ち東園に止まり、帝の桐の上に集い、帝の竹の實を食し、身 沒するまで去らず。

と云う。ここでの「桐」が梧桐を指すのは、『永樂大典』卷三三三七引『韓詩外傳』が「黃帝時、鳳凰棲帝梧桐、食帝竹實。」に作り、『說苑』辨物にも「黃帝即位、……於是鳳乃遂集東園、食帝竹實、棲帝梧桐、終身不去。」とあることから知れる。『莊子』秋水にも

夫鵷雛發于南海而飛于北海、非梧桐不止、非醴實不食、

非醴泉不飲。

夫かの鵷雛（成玄英疏「鸞鳳之屬」）は南海より發して北海に飛び、梧桐に非ざれば止まらず、醴實（成玄英疏「竹食也」）に非ざれば食せず、醴泉に非ざれば飲まず。

と見え、梧桐と鳳凰の關係の深さが一層際立っている。

また『太平御覽』卷九五六引『王逸子』には

木有扶桑・梧桐・松柏、皆受氣淳矣。異於群類者也。

木に扶桑・梧桐・松柏有り、皆な氣を受くること淳し。

群類に異なる者なり。

という記事が見え、梧桐が扶桑とともに特別な樹木として記されていることが注目される。

前項で考察した通り、鳳凰は宇宙山や世界樹によって天と連結された帝王の墓所の樂園の表象として見られるものであり、それが止まる特別な樹木である梧桐にも、世界樹としての機能があったのではなからうか。『王逸子』で扶

桑と並び稱される樹木と認識されていたのも、梧桐の世界樹としての性格を十分にうかがわせるものである。『山海經』においては帝王が死ぬことで豊饒な樂園的世界が實現されたのであるが、『韓詩外傳』では黃帝が齋戒することによって生きたがらに樂園を實現させたのであり、梧桐は天の社を傳える存在として缺かせないのである。こうした世界樹としての梧桐が宇宙山の名に轉用されたのが、ほかならぬ蒼梧であり、名義の上からも、蒼梧の宇宙山としての屬性が認められるのである。

#### (四) 崑崙と蒼梧の機能分化

前項までの考察において、崑崙山が宇宙山として信仰され、蒼梧山もまた崑崙山と同様の宇宙山の機能を持つことが明らかになった。しかし崑崙山は本來中國の西方の羌族に由来すると考えられている。聞一多は姜姓の齊は羌族の末裔が東遷したもので、彼等がもともと持っていた不死の傳説に東方民族の影響が加わって獨自の神仙思想を完成したと考え、『史記』秦始皇本紀や封禪書の記述から考證可

能な戰國から秦にかけての神仙家を韓の侯生、趙の安期生、魏の石申、燕の宋毋忌・正伯僑・羨門高・元谷・最後・盧生、齊の徐市(福)・韓終とし、この分布はそのまま神仙家の集團が西方から三晉・燕を経て齊に遷る過程を示しているとした<sup>⑬</sup>。不死の觀念が強い崑崙山も、羌族に由来する神仙思想と密接に關係すると考えられるのである。

ところで既に引いた『楚辭』離騷には「朝發軔於蒼梧兮、夕吾至乎縣圃。(朝に軔とあを蒼梧に發し、夕に吾は縣圃に至る。)」とある。屈原が天上へ昇ろうとする場面であるが、その出發點は蒼梧山である。つまり崑崙山が天への通路であるのに對し、蒼梧は現實世界における聖山として描かれているのである。

一方九疑は『楚辭』離騷と九歌において定型的な表現で現れる。恐らく九疑は楚地における宇宙山の最も古い形とどめているのであり、神の降臨する天地の通路と認識されていたのであろう。蒼梧は舜の葬地とされたことから、帝王の墓所としての機能がより強調された形で傳えられたものと見られる。

これを要するに、西方に由來すると思われる崑崙と楚土着の蒼梧や九疑は、いずれも天への通路としての宇宙山の機能を持つ山として信仰を集めていたのが、異文化の交流が増大するにつれて競争を生じ、宇宙山と現實の山という機能分化を生じたと考えられるのである。

かくて戰國末期には、宇宙山としての山は、神仙思想と結びついた崑崙と蓬萊・瀛洲・方丈のいわゆる三神山に集約され始め、帝王の墓所と結びついた他の山々は、その樂園的世界の記述にわずかな痕跡をとどめるようになっていった。先に挙げた神仙家の東遷と勢力の擴大が、このことと大いに關係していることであろう。

### 三 宇宙山から「歌枕」へ——後世の蒼梧

先秦時代の蒼梧が宇宙山としての機能を持っていたことを前章までで考察してきたが、その後蒼梧が「歌枕」となるまでにはどのような経過をたどったのであろうか。

漢代においては、文學作品でも蒼梧はなお宇宙山の記憶をとどめている。例えば『文選』卷八・司馬相如「上林

賦」には

獨不聞天子之上林乎、左蒼梧、右西極、丹水更其南、紫淵更其北。

獨り天子の上林を聞かずや、蒼梧を左にし、西極を右にし、丹水は更に其の南、紫淵は更に其の北なり。

と云う。「西極」と對にした形で、東南の端の宇宙山たる蒼梧の名を用いることにより、上林苑がいわば「ミニ天下」であるというモチーフを示していることは、大室幹雄氏も指摘する通りである。「上林賦」ではこの後に

於是蛟龍赤螭、鯀鱗漸離、蝮蝮鯪鮪、禹禹魍魎、捷鱗掉尾、振鱗奮翼、潛處乎深巖。魚鼈譟聲、萬物衆夥。明月珠子、的磔江靡、蜀石黃磬、水玉磊砢、磷磷爛爛、采色滢汗、叢積乎其中。鴻鸕鵠鴝、鴛鴦屬玉、交精旋目、煩鶩庸渠、箴疵鴝廬、群浮乎其上。汎淫汜濫、隨風澹淡、與波搖蕩、奄薄水階、啞喋菁藻、咀嚼菱藕。



是に於いて蛟龍・赤螭、鮪まぐろ・漸離、鯛ぎぎ・鮫このしろ・  
鰈おわらな・鮓たら、禺禺ぎようぎよう・魃かれい・鱒さんしやうおあり、鱗を擡あげて尾  
を掉ふるい、鱗を振い翼を奮い、深巖に潜處す。魚鼈 謹聲  
あり、萬物 衆夥なり。明月の珠子、江の靡ほろに的磔  
(かがやくさま)たり、蜀石・黄磬、水玉 磊何(積み重なるさま)たり、磷磷爛爛、采色 澹汗(照り輝くさま)  
として、其の中に叢積す。鴻(白鳥)・鸕くぐい・鵠のがん・鴝の鴝・鴝  
駕がらよう・屬玉、交精(こじさぎ)・旋目ほしこい、煩鶩・庸渠、箴疵あおさき・鴝あおさき・廬う  
其の上に群浮す。汎淫汜濫し、風に隨いて澹淡たり。波  
と搖蕩し、水階を奄薄(おおいあつまる)す。青藻を啜そうち  
(くちばしですする)し、菱藕を咀嚼す。

と、魚や鳥や鑛物の豊饒さを述べているが、蒼梧という宇宙山があればこそ、上林苑には盡きせぬ豊饒が約束されているのであり、そこが天子のような選ばれし者でなければ立ち入ることのかわかない「近寄り難い樂園」であることは、先に見た『山海經』海内西經の、仁羿でなければ登れない崑崙のイメージと同様である。なお『三輔黃圖』卷四

蒼梧考(大野)

引『漢舊儀』には上林苑が「方三百里」であったと記されるが、これが前章で見た范林や流黃鄠氏之國などの特徴に做つたものであることは言を俟たないであろう。

また揚雄「解難」<sup>10)</sup>には

獨不見夫翠虬絳螭之將登乎天、必聳身於倉梧之淵。

獨り見ずや 夫かの翠虬絳螭の將に天に登らんとするに、必ず身を倉梧の淵に聳かすを。

と云うが、倉梧(蒼梧)は虬螭が天へ上下する通路として認識されているのであり、深い淵を渡らなければ天に昇ることができない宇宙山のモチーフを、刻苦艱難なくしては『太玄經』のような深遠な哲學を大成することができないという比喩に用いているのである。

一方武帝の元鼎六(紀元前一二)年に至つて、蒼梧は嶺南の郡名ともなった。蒼梧郡は現在の廣東省を中心とする一帯であり、戰國期の楚地の南端からさらに南に下がった地域である。これは漢の軍がこの地の獨立政權であつた

南越を滅ぼした後に置かれた郡の一つであり、漢の版圖が南方に廣がったため、楚地の南端であつた蒼梧の名を借りたものと見られる。蒼梧は天下の南端としてここに獨り歩きを始めるのである。

かくて後漢から六朝期には、蒼梧は「歌枕」として展開していく。『文選』卷二〇・謝朓「新亭渚別范零陵詩（新亭の渚に范零陵と別るるの詩）」に

洞庭張樂地 洞庭 樂を張るの地、

瀟湘帝子游 瀟湘 帝子遊ぶ。

雲去蒼梧野 雲は去る 蒼梧の野、

水還江漢流 水は還る 江漢の流れ。

と云い、江淹「效阮公詩（阮公に效うの詩）十五首・其七」<sup>18</sup>に

夏后乘兩龍 夏后 兩龍に乗り、

高會在帝臺 高會 帝臺に在り。

榮光河洛出 榮光 河洛より出で、  
白雲蒼梧來 白雲 蒼梧より來たる。

と云う如く、蒼梧と雲と結びつけた用法が多くなるが、山内春夫氏は第一章で引いた『歸藏』の「白雲が蒼梧から出て大梁に入る」という記事から、白雲の瑞祥としてのイメージが詩人を引きつけたのであらうと指摘する<sup>19</sup>。直接的には確かにその通りであるが、それに加えて蒼梧の南の界限の地としてのイメージも、このような常套表現を形成するに至った要因として指摘しなければならぬであろう。蒼梧が「南の果て」であつたからこそ、謝朓は南へ行く友人を送る詩にこれを用い、江淹は北方の地名と對にして用いたのである。

また謝朓の詩は黄帝が咸池の音楽を披露した洞庭や瀟湘の帝子<sup>20</sup>とともに神話的モチーフの一つとして蒼梧を用いており、江淹の詩は兩龍に乗つたと傳えられる夏后啓<sup>21</sup>、浴水に璧を沈めたところ河から光が出て青龍が現れたと傳えられる周の成王<sup>22</sup>など歴代の聖王にまつわる神話とともに蒼梧

をうたっている。六朝期の蒼梧は南方のエキゾチックで神話的な雰囲気醸し出す「歌枕」だったのである。

これが盛唐に至り、蒼梧は楚地や嶺南をさす「歌枕」として定着する。李白の「贈饒陽張司戶燧（饒陽の張司戶燧に贈る）」には

朝飲蒼梧泉 朝に飲む 蒼梧の泉、

夕棲碧海烟 夕に棲む 碧海の烟。

寧知鸞鳳意 寧ぞ知らん 鸞鳳の意、

遠託椅桐前 遠く椅桐の前に託するを。

と云うが、ここでの蒼梧は碧海と對にして、南方と北方を指す語として用いられており、既に引いた『莊子』秋水の南海から北海へ飛ぶ鸞雛（鸞鳳の一種）を暗示させている。そして南方から饒陽（現河北省）の張燧を訪ねてきた自らを鸞雛にたとえているのであり、蒼梧の「梧」は「椅桐」と縁語である。蒼梧は南方を意味すると同時に、鸞鳳という神話的モチーフを引き出す役割も果たしているのである。

蒼梧考（大野）

李白の詩において蒼梧と鳳の組み合わせは他に「涇川送族弟錡（涇川に族弟の錡を送る）」の

歎息蒼梧鳳 歎息す 蒼梧の鳳の、

分棲瓊樹枝 分かれて瓊樹の枝に棲むを。

清晨各飛去 清晨 各々飛び去り、

飄落天南垂 飄落す 天の南垂。

もあり、蒼梧は鳳の止まる梧桐と天下の南陲との掛詞になっている。

ところが杜甫の「奉送魏六丈佑少府之交廣（魏六丈佑少府之交廣に之くを送り奉る）」には

遇我蒼梧陰 我に遇う 蒼梧の陰、

忽驚會面稀 忽ち驚く 會面の稀なるに。

とある。この詩は『杜詩詳注』によれば交州に赴く魏佑を潭州（現湖南省）で送った時の作品であり、「蒼梧陰」は潭

州を指すが、そこには六朝期のようなエキゾチックな雰圍氣はもはや見られない。「詠懷」其二に至っては、

邦危壞法則 邦は危うくして法則壞れ、

聖遠益愁慕 聖は遠くして益々愁慕す。

飄飄桂水遊 飄飄して桂水に遊び、

悵望蒼梧暮 悵望す 蒼梧の暮れ。

と、蒼梧が二度と現れない聖帝舜の象徴として用いられ、悲哀と追慕の情を表すまでになる。蒼梧を舜の葬地として用いる例は他にも「同諸公登慈恩寺塔（諸公の慈恩寺の塔に登るに同じくす）」に

廻首叫虞舜 首を廻らし虞舜を叫べど、

蒼梧雲正愁 蒼梧 雲 正に愁う。

惜哉瑤池飲 惜しいかな 瑤池の飲、

日晏崑崙丘 日は晏し 崑崙の丘。

と云う。「瑤池の飲」は『穆天子傳』卷三に見える、周の穆王が瑤池で西王母とともに飲んだ故事をいうが、ここでは楊貴妃に溺れて政治を顧みない玄宗を暗にたとえている。この詩も舜よ出でよと叫んでも蒼梧の邊りには雲が愁わしげに漂うばかりという追慕と悲哀の情をうたうことに變わりはない。舜帝の葬地はもはや永遠の生命が約束された樂園ではなく、決して歸っては來ない聖帝を待ち望む悲しみの場所となつてしまつていた。直後に現れる崑崙も、到達すべき目標としての樂園ではなく、ただ恨めしく追慕するだけの、遠い昔のユートピアに過ぎなくなつてゐる。これまで天下の南端のエキゾチックな神話的イメージを象徴していた蒼梧は、もはや現れない聖帝や再現のかなわないユートピアの追慕によつて現世の混濁を際立たせる「歌枕」へと、その意味を百八十度逆轉させた新たな展開を見せるのである。

一方、九疑は漢から六朝にかけて神仙の住む山としてのイメージが定着した。漢代においては司馬相如「大人賦」

歴唐堯於崇山兮、過虞舜於九疑。

唐堯を崇山に歴て、虞舜を九疑に過る。

とあり、舜と關係の深い山として使われる。また王褒「九懷」陶壅には

吾乃逝兮南娛 吾乃南娛に逝き、  
道幽路兮九疑 幽路を九疑に道びく。

とあるが、これは天界遊行の後に地上を周遊する一場面であり、舜を暗示するとともに神話的イメージを醸し出す役割を果たしている。また曹操「陌上桑」<sup>②</sup>には

駕虹蜺 乘赤雲 虹蜺を駕し 赤雲に乗り、  
登彼九疑歷玉門 彼の九疑に登り玉門を歴。  
濟天漢 至崑崙 天漢を濟り 崑崙に至り、  
見西王母謁東君 西王母に見え東君に謁ゆ。

著 梧 考 (天野)

とあり、崑崙とともに昇天の際の通路として描かれる。

六朝期にも『文選』卷五・左思「吳都賦」には、

峭格周施、罽罽普張。罽罽瑣結、罽罽連綱。隄以九疑、禦以沅湘。

峭格(柵) 周く施して、罽罽(鳥の網) 普ねく張る。罽罽(鳥の網) 瑣結し、罽罽(鹿の網と兔の網) 綱を連ぬ。隄(堤)に九疑を以てし、禦(御)に沅湘を以てす。

とあり、楚地の南端を示すと同時に、そこが狩りの獲物の豊饒な樂園であることを暗示していて、この少し後には次々と獲物が捕らえられるさまが描かれる。

『神仙傳』卷三・王興には、漢の武帝が嵩山に登って仙人に會い、仙人が「吾は九疑の人なり。聞く中岳の石上の菖蒲は一寸にして九節、以て之を服して長生すべしと、故に來りて採るのみ。」<sup>②</sup>と言つてから忽然と消えてしまったという故事を載せており、神仙の昇天の通路としてのイメージはなお残っている。『文選』卷十一・孫綽「遊天台

山賦（天台山上遊ぶの賦）」には

結根彌於華岱、直指高於九疑。

根を結ぶこと華岱よりも彌く、直に指せること九疑よりも高し。

とあつて、華山や泰山と並べて用いられており、また『文選』卷二十二・沈約「鍾山詩應西陽王教（鍾山の詩 西陽王の教に應ず）」には

勢隨九疑高 勢は九疑に隨いて高く、

氣與三山壯 氣は三山と與に壯なり。

『文選』卷二十六・謝靈運「初發石首城（初めて石首城を發す）」には

越海凌三山 海を越えて三山を凌ぎ、

遊湘歷九嶷 湘に遊びて九嶷を歴ん。

と、蓬萊・方丈・瀛洲の東海三神山と對にして用いられ、神仙の山としてのイメージが強まっているが、そこには天につながる宇宙山の記憶をとどめているといえる。蒼梧が楚地や天下の南端、また舜の葬地としてのイメージを強めていったのに對し、九疑は『楚辭』に神々の降臨する山として描寫されたことから、東海三神山に並ぶ神仙の山としてのイメージを強めていたのであろう。

唐代になると、李白の「遠別離」は

或曰堯幽囚舜野死 或いは曰く堯は幽囚し舜は野死すと、

九疑聯綿皆相似 九疑 聯綿として皆な相い似たり、

重瞳孤墳竟何是 重瞳の孤墳は竟に何くにか是れある。

と、舜の葬地に聳える山として用いているが、一方で「送王屋山人魏萬還王屋（王屋山人魏萬の王屋に還るを送る）」では

稍稍來吳都 稍稍 吳都に來たり、

徘徊上姑蘇 徘徊 姑蘇に上る。

烟綿横九疑 烟綿 九疑に横たわり、

潏蕩見五湖 潏蕩 五湖を見る。

と云い、姑蘇にある山に「九疑」の名を用いている。この後には

君來幾何時 君の來たるは幾何時ぞ、

僊臺應有期 僊臺 應に期有るべし。

と云うことから、昇仙の入口となるべき山の意味で「九疑」の名を用いたものと考えられよう。また「江西送友人之羅浮（江西に友人の羅浮に之くを送る）」でも

桂水分五嶺 桂水 五嶺に分かたれ、

衡山朝九疑 衡山 九疑を朝せしむ。

疇昔紫芳意 疇昔 紫芳の意、

已過黃髮期 已に過ぐ 黄髮の期。

蒼梧考（大野）

と、南端の地をイメージするとともに、仙界を暗示する意味を持たせている。「紫芳意」は「仙人になつて紫芝を採る生活を願っていた」という意。

ところが杜甫「上水遣懷」になると

冥冥九疑葬 冥冥たり 九疑の葬、

聖者骨亦朽 聖者 骨も亦た朽ちたり。

蹉跎陶唐人 蹉跎たり 陶唐の人、

鞭撻日月久 鞭撻せられて日月久し。

また「暮冬送蘇四郎僕兵曹適桂州（暮冬に蘇四郎僕兵曹の桂州に適くを送る）」でも

爲入蒼梧廟 （我が）爲に蒼梧の廟に入り、

看雲哭九疑 雲を看て九疑に哭せよ。

と、舜の葬地に關連づけており、蒼梧と同様にもはや戻れない理想の上古を追慕する氣持の表現として用いられて

いる。仙人や仙界をイメージする詩語として用いられてきた九嶷も、杜甫に至って蒼梧と同じく「到達のかなわな理想郷」としての用法が確立したのである。

結 語

これまで述べ来たことを要約すれば、戦國期における蒼梧は本来天地をつなぐ通路としての宇宙山の機能を持っていたが、外來の宇宙山である崑崙や東海三神山に宇宙山としての機能が集約されるとともに、蒼梧は『山海經』などでの記述にその痕跡を残すこととなった。しかしその後文學作品においても、蒼梧は楚地に限らず南方のエキゾチックな神話的風物を導き出す「歌枕」として用いられ、そこには宇宙山のイメージがなお記憶をとどめていた。しかし盛唐の杜甫に至って、二度と實現できない聖帝舜の治世を象徴する意味で蒼梧を用い、そこに追慕と悲哀の情を盛り込む用法が生まれてくる。杜甫において、樂園の神話は眞の終焉を迎えたのである。

蒼梧は漢の版圖の擴張とともに、楚地から嶺南の郡名へ

と移動し、廣く南方を指す地名となったのであるが、崑崙も同様に時代が進むにつれて移動を繰り返してきたことも思い起こさずにはおけない。唐末の裴鉶の傳奇小説「崑崙奴」に登場する崑崙奴は東南アジアから送られた奴隸であり、南宋の趙汝适『諸蕃志』には西南海上の國として「崑崙層期國」が記され、一説には東アフリカのマダガスカル島を指すという<sup>③</sup>。當時考え得る西方ないし西南方の邊境に「崑崙」の名が當てられたものであろう。東海上の宇宙山である蓬萊山もまた、六朝宋の地理書『南越志』には、現在の廣州の南にある羅浮山が蓬萊山と呼ばれていたという<sup>④</sup>。一方、蒼梧には海外へ飛び出すほどのエネルギーはなかったとはいえ（現代の吉川幸次郎氏に至ってそれはようやく實現したが、中國の南方へと移動しただけではなく、東方へ移動する傳説も生まれた。『山海經』海内東經「都州在海中」の條の郭璞注には、都州（現江蘇省東海）の山は蒼梧が移ってきたもので、その上には南方の風物を産するとい<sup>⑤</sup>う。蒼梧ももとは崑崙と同じ宇宙山であったからこそ、中國の「邊遠」が遠くへ廣がついていくにつれて移動してい



たのであり、鸞鳳をはじめ神話的モチーフと結びついた用法も、唐代まで根強く残り續けたのである。

「もう一つの崑崙山」として蒼梧を認識するとき、詩文におけるこの「歌枕」も新たな生命と輝きを持って見えてくることであろう。

## 註

- ① 九疑には「九疑」「九疑」の兩様の表記があるが、本稿では原文の引用を除き「九疑」に統一する。
- ② 吉川幸次郎「知非三集」(「吉川幸次郎全集」第二十四卷所収、三三七頁)
- ③ 崑崙には「崑崙」「崑崙」の兩様の表記があるが、本稿では原文の引用を除き「崑崙」に統一する。
- ④ 諸本は「基」に作るが、郝懿行は『太平御覽』卷五五一の引くこの注が「墓」に作ることから「基、當爲墓字之譌」としており、今これに従って改める。
- ⑤ 御手洗勝『古代中國の神々』一九八四年、創文社、附録三『穆天子傳』成立の背景
- ⑥ この機能についての研究は數多く、曾布川寛『崑崙山への昇仙』(一九八一年、中公新書)、小南一郎『中國の神話と物語り』(一九八四年、岩波書店)、伊藤清司『死者の棲む樂

蒼梧 考(大野)

園』(一九九八年、角川選書)等がある

- ⑦ 『エリアーデ著作集』第四卷第一章「中心のシンボリズム」等、前田耕作譯、一九七四年、せりか書房
- ⑧ 注⑥参照。

⑨ 「先列中國名山大川通谷、禽獸水土所殖、物類所珍、因而推之、及海外人之所不能睹。……以爲儒者所謂中國者、於天下乃八十一分居其一分耳。中國名曰赤縣神州。赤縣神州內、自有九州。禹之序九州、是也。不得爲州數。中國外、如赤縣神州者九、乃所謂九州也。於是有所裨海環之。人民禽獸、莫能相通者。如一區中者、乃爲一州。如此者九。乃有大瀛海、環其外。天地之際焉。」

- ⑩ 御手洗勝『古代中國の神々』前掲、六六二頁
- ⑪ 小南一郎『西王母と七夕傳承』一九九一年、平凡社、第五章
- ⑫ 『王逸子』は『隋書經籍志』には見えないが、『太平御覽』には五回引かれる。その一部は「意林」卷四に「正部十卷」として引かれており、『隋書經籍志』子部・儒家に録する『梁有王逸正部論』のことと考えられる。
- ⑬ 聞一多「神仙考」、『聞一多全集』甲集所收、一九四七年、開明書局、一七〇―一七三頁
- ⑭ 『文選』李善注は文類の説を引いて「蒼梧郡屬交州、在長安東南、故言左。爾雅曰、至于幽國爲西極。在長安西、故言右。」と云うが、長安に比較的近い幽と、遙か東南の蒼梧郡

を對にするのは不自然である。この「西極」はむしろ『楚辭』離騷に「朝發軔於天津兮、夕餘至乎西極」とある、西の邊遠としての「西極」のイメージに近いと思われる。

15 大室幹雄『劇場都市』、一九八一年、三省堂、三一八―三一九頁

16 『漢書』揚雄傳下所收

17 「(元鼎)六年冬十月、……遂定越地、以爲南海・蒼梧・鬱林・合浦・交趾・九眞・日南・珠厓・儋耳郡。」(『漢書』武帝紀)

18 『江文通集』(四部叢刊本)卷三三所收

19 山内春夫「中國の詩に見る『蒼梧の雲』について」、『大谷女子大國文』一九八八年三月號所收、一三四頁

20 「北門成問於黃帝曰、帝張咸池之樂於洞庭之野、……」(『莊子』天運)

21 「帝子降兮北渚」(『楚辭』九歌・湘夫人)

22 「大樂之野、夏后啓于此儷九代、乘兩龍、雲蓋三層。」(『山海經』海外西經)

23 「成王觀于河洛、沈璧禮畢、王退俟。至于日昧、榮光竝出、幕河、青雲浮洛、青龍臨壇、銜玄甲之圖、吐之而去。」(『文選』卷三九・江淹「詣建平王上書」李善注引『尚書中候』)

24 「吉日甲子、天子賓于西王母、乃執白圭玄璧以見西王母、好獻錦組百純、□組三百純。西王母再拜受之。□乙丑、天子

觴西王母于瑤池之上。……」

25 『史記』及び『漢書』司馬相如傳所收

26 『宋書』樂志及び『樂府詩集』卷二十八所收

27 「漢武上嵩山、登大愚室、石起道宮、使董仲舒・東方朔等齋潔思神。至夜忽見有仙人、長二丈、耳出頭顱、垂下至肩。

武帝禮而問之、仙人曰、『吾九疑之人也。聞中岳石上葛蒲一寸九節、可以服之長生、故來採耳。』忽然失神人所在。」

28 中野美代子『龍の住むランドスケープ』一九九一年、福武書店、五九頁

29 「此山(羅浮山)本名蓬萊山、一峯在海中、與羅山合、因名此山」(『太平御覽』卷四一引『南越志』)

30 「今在東海胸縣界、世傳此山自蒼梧、從南徙來、上皆有南方物也。」